

2015年度移民政策学会冬季大会@中京大学

ブラジル系移民の帰還をめぐる移住システム

—— 横浜市鶴見区の移民コミュニティにおけるジェンダー分業に着目して ——

Migration System of Brazilian Returnees:

Focusing on the Gender Division of Labour in the Immigrant Communities in Tsurumi, Yokohama

一橋大学大学院社会学研究科

Graduate School of Social Sciences, Hitotsubashi University

日本学術振興会特別研究員 DC1

JSPS Research Fellow (DC1)

藤浪 海

Kai FUJINAMI kaifujinami@yahoo.co.jp

キーワード：ブラジル系移民、帰還移住、ジェンダー

本発表の目的は、横浜市鶴見区のブラジル系移民を事例として、従来主に経済変動というマクロ水準の要因によって説明がなされてきたブラジルへの帰還移住を、メゾ水準やミクロ水準の要因（移民コミュニティやネットワーク、家族）と関連付けることによって、具体的に誰がどのような要因によって帰還するのかを検討し、コミュニティにおけるジェンダー分業がかれらの帰還のあり方を強く規定していることを明らかにすることである。

2008年のリーマンショックにより、多くの在日ブラジル系移民が帰還した。なぜなら多くの集住地では、ブラジル系移民たちは輸出志向型の製造業の非正規労働者となっており、リーマンショックにより多くの人々が解雇されたからである（丹野、2009；樋口、2010）。一方、本発表で取り上げる横浜市鶴見区は、ブラジル系移民集住地にしては珍しく、多くの男性移民が自営電設業者として働いている地域であり（樋口、2012；藤浪、2015）、他の集住地とはその経済的基盤が大きく異なっている。ではこの地域でもリーマンショックは他の地域と同様の影響を及ぼしたのだろうか。発表者が2012年から当該地域で行ってきた調査では、多くの鶴見のブラジル系移民たちは、リーマンショックは一時的な影響をもたらしても、他のコミュニティほどの大きな打撃はもたらさなかったと語っている。

しかしかれらは同時に、鶴見でも近年ブラジルへの帰還者が多いとも語る。鶴見のブラジル国籍者数を見ても、（日本国籍の取得や他都市への転出・転入、自然増・減を考慮に入れなければならないが）たしかに減少傾向が読み取れる。さらに、具体的に帰還者のジェンダーに着目してみると、夫婦で必ずしも共に帰還しているわけではなく男性あるいは女性のみで帰還していたり、また男性と女性で帰還の時期も異なっていたりと、ジェンダー間で様々な違いが見られる。

他のコミュニティと経済的基盤の異なる鶴見からもなぜ帰還が起こるのか。そしてなぜジェンダーによって帰還のあり方に差異が見られるのか。この問いを明らかにするには、マクロ水準の要因のみならず、メゾ水準やミクロ水準の要因に着目し、移住を引き起こす要因をより精緻に検討する必要がある。そこで本研究では、鶴見からブラジルへの帰還者に対するインタビュー調査を実施し、複層的な視角を持つ移住システム論

（Massey et al. 1987）を分析枠組みとして用いて具体的に誰がどのような要因によって帰還したのかを検討

した。

インタビュー対象者は22名で、発表者がこれまでの鶴見での調査で協力を得てきたブラジル系移民に紹介してもらった。2004年から2014年に帰還した20名(男性15名、女性5名)にはブラジルで、2015年に帰還した男性1名と、2011年に帰還し2014年末に再来日した女性1名には、それぞれ帰還直前、再来日直後の2015年1月に鶴見でインタビューを行った。

分析の結果、直接的な帰還要因として次の4つが析出された。それは①高齢化による電設会社の退職、②経済変動による非正規労働者の失職、③東日本大震災が子育てに与えた不安、④高齢化したブラジルの親のケアである。注目したいのは、ジェンダー間での帰還要因の差異である。東日本大震災により帰還したのは女性であったが、それ以外の理由は主として男性であった。

なぜジェンダー間で差があるのか。答えを先取りしてしまえば、それはマクロ水準の経済変動や自然災害、ミクロ水準の高齢化といった要因が、メゾ水準の移民コミュニティを媒介してジェンダー間で異なる形で作用していたからであった。鶴見では、男性は自営電気工事業者として、家庭で「主な」家計支持者としての役割を担い、女性は「補助的な」家計支持者としての役割を担う一方、家庭内の再生産労働も担っている。こうした役割の差異が、家庭の中で誰が帰還するのかということに強く影響し、帰還をめぐる構造のなかに組み込まれていたのである。

この事例が与えてくれる1つの示唆は、女性のみならず男性の移住においてもジェンダーという要因が大きな意味を持つということである。Hondagneu-Sotelo (2003) は、しばしば移民研究の中で女性のみが「ジェンダー化された存在」として扱われてきたことを批判的に指摘した。かつて、男性しか見てこなかった移民研究に対する批判の中で、女性移民が注目されるようになり、ジェンダーという分析軸が導入されるようになった。だが日本においては男性移民を見る際にジェンダーという観点から検討がなされることは未だ多くない。「ジェンダーと移民の検討を標榜する研究が男性の経験を含まないとき、それは関係論的で動態的なジェンダー理解を手放すことになる」というGeorge (2005=2011: 31) の指摘を踏まえれば、今後も男性たちの移住において「男性」であることが持つ意味を改めて見つめ直していく必要があるだろう。

【参考文献】

- 藤浪海, 2015, 「移民ネットワークとしてのオキナワン・ディアスポラ——横浜市鶴見区のブラジル系・ボリビア系・アルゼンチン系移民の事例から」『年報社会学論集』28: 64-75.
- George, Sheba M., 2005, *When Women Come First: Gender and Class in Transnational Migration*, Berkeley: University of California Press. (=2011, 伊藤るり監訳『女が先に移り住むとき——在米インド人看護師のトランスナショナルな生活世界』有信堂高文社.)
- 樋口直人, 2010, 「経済危機と在日ブラジル人——何が大量失業・帰国をもたらしたのか」『大原社会問題研究所雑誌』622: 50-66.
- , 2012, 「鶴見で起業する——京浜工業地帯の南米系電気工事業者たち」樋口直人編『日本のエスニック・ビジネス』世界思想社、251-76.
- Hondagneu-Sotelo, Pierrette, 2003, “Gender and Immigration: A Retrospective and Introduction,” Pierrette Hondagneu-Sotelo eds., *Gender and U.S. Immigration: Contemporary Trends*, Berkeley: University of California Press, 3-19.
- Massey, Douglas S., Rafael Alarcon, Jorge Duranda and Humberto González, 1987, *Return to Aztlan: The Social Process of International Migration from Western Mexico*, Oakland: University of California Press.
- 丹野清人, 2009, 「外国人労働者問題の根源はどこにあるのか」『日本労働研究雑誌』587: 27-35.